慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戸田武雄著 計画経済と職能倫理
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.7 (1941. 7) ,p.922(112)- 931(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19410701-0112
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410701-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戸田武雄著「計畫經濟と職能倫理」

氣賀健三

標題の著書は著者戸田氏が時々に與へられた課題に應じて新聞や雜誌に書いた小論文を集めたものである。專ら現代の時局に關係あるものであるが、其取扱つて居る問題は實に多方面に亙り、著者の博覽强記を思はせる。內外の學者の文献を渉獵しつゝ、計畫經濟を論じ、技術を論じ、戰爭を語り、家族論から職能倫理其他幾つかの經濟問題を取扱つて居る。その中計畫經濟に關する二つの論文を除いては、何れも簡單なもので特別の學問的勞作といふべき程のものではないが、著者が引用したり紹介したり批評したりして居る國內國外の多數の範圍の廣さには敬服に値ひするものがある。近年に於ける著書の飜譯の數多く上つて居ることを思ひ合せるならば、著書の學問的精進には怠惰なるものを鞭つものがある。

此書物で最も大な部分を占めるものは計畫經濟に關する二つの論文である。一つは「統制の經濟學」と題し、舊四六判、三百餘頁の本書の半分の量を占め、他の一つは「計畫經濟の理論」と題し、殘餘の三分の一程の分量を占める。前者は二部に分たれ、前半は計畫經濟の可能性に就て前ドイツ社會民主主義者エミール、レーデラーの所說を飜譯的に紹介せるものである。著者はレーデラーと「大體に於て意見を同じくして居る」といふことであるから、紹介は同時に著者の意見と見てよいのであらう。後半は忠實に英國の社會主義者コールの著書「Practical economics or studies in econmic planning 1937」に依つて各國の統制經濟又は計畫經濟の型を描き出さうと試みたものである。

他の一つの論文は之亦レーデラーの計畫經濟論の飜譯的紹介であるが、前記のはアメリカで編纂された社會科學エンサイクロペディアに寄稿した原著者の論文 National ecommic planning の紹介であるに對し、後者は原著者の小著 Planwirtschaft の紹介である。兩論文其に今日より十年近くも以前に、當時のドイツの深刻な不景氣を前にして發表されたものであり、現代の社會事情と大いに異る所がある。併し紹介者は、既に歷史的になつたけれどもミーゼス流計畫經濟論の流行する今日之を說く理由が大いに在ると考へるのである。

著者は嘗て數ケ月前公刊した其著「經濟哲學」（上卷）に於て筆者のミーゼス流の計畫經濟不可能論を批判せられたが、筆者は之まで知らずに居り、最近友人から敎へられたので、今此機會に批判に答へ、且つ筆者の眞意を徹底させたいと思ふ。

著者の意見はレーデラーの說に大體贊成であるといふことであるが、本著書に於ける紹介には修正や何等變更を加へられた跡を見ることはできない樣である。レーデラーの說に付ては筆者は嘗て本誌第三十卷第九號に簡單な批判を爲し、其不徹底な論旨を難じた結論に就ては何等變へる必要はないと思つて居る。社會主義的計畫經濟は合理的に不可能である。

著者は先づ第一に筆者の採る所の純粹經濟學的觀察を排擊せられるのであるが、經濟人、經濟性の原理から出發する議論は、筆者の考へに依れば、一面的、孤立化的方法に基くものであつて、それはそれ自體として認識價値を有するものと考へる。純粹經濟學的方法の外に、純粹理論の社會的條件を取扱ふ所の經濟の社會學的研究を私は決

して否定する譯ではなく、今日の如き轉換期の時世に於ては反つて頗る必要であり、從來の個人主義的な資本制經濟組織の性格變化の望まれて居る時代には猶ほ一層必要であるとさへ考へる。がそれと同時に純粹經濟的觀察も亦斯樣な混亂期に於て、一面の眞理を指摘する上に於て重要な任務を果すものである、私は著者がレーデラーのイデオロギーを克復され、若し純粹經濟學を排擊せられるならば、其代りになる所の、現代の支配的なイデオロギーを以てする經濟社會學を組立てられ、以て社會學的觀察に之まで餘り注意を拂はなかつた者に對して敎示せられんことを願ふのである。

現代の全體主義的思想は數年前まで支配的であつた個人主義の思想と正反對の立場に立つものである。而して自由主義の政策は歷史的にも不可能となり、國策的にも禁止せられる程になつた。筆者は嘗て需要に應じて社會的生產物を益々增大せしむるといふ經濟的自由の效果を自主的なる統制を通じて實現せられることを希望したが、それは我が國に於て木に據つて魚を求むるものとなつてしまつた。統制に統制が加り、それが組織的計畫性を帶びて來るに連れて嘗ての自主的精神は束縛に束縛を加へられる樣になつた。況して個人主義の思想、資本制組織に於ける營利的精神、私有資本の營利的活躍が排斥せられ、新しき全體主義の思想の下に國防國家の要求が至上命令的になるに及び、經濟的活動に於ける個人的自由は生產より消費に至るあらゆる部面に於て著しく制限されるに至つたのである。

斯くの如き現象は私の組織的な自治統制による自由の效果への希望を空しくしたけれども、それは同時に他方に於て計畫經濟が必ずや人々の勞働の自由も、消費の自由をも著しく制限するのでなければ行はれ難いといふ論旨を實地に證明することになつたのである。

私が議論の對象に選んだ社會主義社會は、レーデラーの所謂る完全に社會化されたる社會であり、私の議論は專ら經濟技術的なものに限られたが、現代に於て斯樣な完全な形で實行されて居る計畫經濟は存在しないと思ふ。ロシアこそは唯一の社會主義的な國であるが、今の此國に於て完全な私有財產否認は行はれて居らず、私的市場の存在が認められて居るのである。私は如何に强大なる獨裁的權力を以てしても完全な共產主義の思想を實現することは、經濟的にできないであらうと考へて居る。ロシアに於て五ヶ年計畫が消費の自由を制限することなしに行はれたとレーデラーは書いて居るが、此言葉を其儘承認することはできない。ソウェート當局が一方的に一定の生產計畫を立て、尨大な軍備や重工業に多額の投資を爲し、國民の一般的消費を極度に制限したのは周知の事と思はれるが、革命以後二十有餘年を經た今日に於てすら猶ほ國民の生活水準の極めて低いことは多數のソ聯旅行者の報ずる所である。斯くの如き現象は明かに國民の消費の自由が殆ど一方的に制限されて居るからに外ならぬと思はれる。

加ふるに一方的に生產計畫が立案され、之が增大な政治力に依つて實現されようとする時には、人々の職業選擇の自由も亦著しく制限されざるを得ない。人々にはせい〳〵一定の與へられたる就職の機會の中の何れか一つを選ぶといふ自由がある丈けであつて、自らの發意に依つて或事業を經營したり、任意に仕事を起したりすることはできないであらう。或る財貨が著しく不足して居ることを知つても、直ちに之を供給する事業を開始しようといふことは計畫の嚴密な意味に於て許されない。長年月に亘る計畫は固より最良の經驗、豫測の手段を講じて立てられるのであらうが、色々な自然的並に社會的な變化、人智の不測といふことの爲に、長年月に亘る計畫が途中に於て色々な不測の條件に遭遇する蓋然性が大く、臨機應變といふことは大規模な計畫に於て容易でなく、結局消費の自由や勞働の自由は極端に制限されざるを得ないであらう。それは個人の權利の平等とか、「欲望に應じて滿足したり、

能力に應じて働く」のを理想に描いて居る共産主義の理想から隔ること遠いものである。

現代の全體主義的といはれる國々に行はれつゝある計畫經濟は、いふまでもなくイデオロギーに於てロシアとは大な懸隔があり、社會主義的計畫經濟をば計畫經濟と呼んで來た舊來の用語に從へば寧ろ別の言葉で、即ち統制經濟と呼んだ方がまぎらはしくなくてよいと思ふのである。此等の國々の全體主義の思想に依れば、消費の自由や勞働の自由を國民に與へるか與へないかといふことは第一次的の問題ではなく、如何にして超個人的な國家的全體目的を達成しようかといふことが第一の課題となる。而して經濟政策上の目的は簡單に言へば國防國家の建設の爲に必要な生産力擴充といへるであらう。それには從來個人主義的な思想と自由主義的な政策に導かれて居つた國民經濟機構を再編成する必要に迫られたのである。此任務を遂行しようとして、猶ほ從來の資本制經濟組織の上に統一的な統制又は計畫の經濟政策を實行しようとする所に現代の苦難があるのである。斯くの如き計畫經濟の强行の背後には故にヘイヤク的でもなく、レーデラー的でもないイデオロギーであるといへるであらう。此政策の成否は今猶ほ試錬の過程に在るのであつて斷言はできないが、それが如何なる目的の爲に遂行されるものにせよ、個人の經濟的自由を獨裁的に制限する傾のあることは明かである。ドイツや日本に於て戰爭の爲に消費物資が一般的に減少しつゝあるといふことは消費を不自由ならしむる重要原因に相違ないが、兎に角國家的計畫に依つて生産財や消費財の生産の方針を定めたり、資本蓄積を課税や强制貯蓄に依つて强行したり、統一的金融統制を實行する時、それが自由に任された場合の國民の需要の充足と大いに喰ちがふであらうことは想像に難くない。唯今日では個人は全體に服從、從屬するものであるといふ立前から一切の個人的欲望は公的必要の前に當然控へなければならないのである。

此意味に於て私は經濟人の前提から出發した立場の主旨は立派に計畫經濟批判に役立て居ると考へて居る。

猶ほ次に二。三推論の過程に於ける論者の批判に答へようと思ふ。

先づ議論の出發點に於て消費者支配の考へ方が論難されるが、生産が如何なる社會關係の下に於ても消費の爲に營まれるといふことは明なことである。再生産の爲の生産といふことは意味をなさない。資本主義機構に於て企業が營利の爲に營まれ、生産力の發展の爲に資本の增殖蓄積が常に企てられる場合に於ても、生産の最終の結果たる消費財が市場に於て捌かれ得るかどうかといふことは最も重大な問題であり、此點資本家の社會的權力を以てしても消費者に强制を加へることはできないのである。再生産行程が反覆され擴大される爲には、生産物が消費市場の需要に適合するといふことがどうしても必要である。生産關係は同時に分配關係をも規定し、勞働者の所得は貨幣賃銀に依存するものであるか、人が何を需要するかは人の主觀的選擇に依據し、されば結局に於て社會に於ける生産の方向を指導するのである。經濟的循環に於ける消費の役割は頗る重要である。

生産が營利の爲に行はれ、資本蓄積の爲に繼續されるといふ資本主義經濟組織に於ても、需要を無視したり之を見誤つた生産を繼續することはできないのである。固より營利的行動が需要と一致しなかつたり、莫大な固定資本運轉の必要が收支採算を無視して商品生産を繼續せしめたり、强行な獨占組織が競爭價格以上の價格設定を行ふことは在るけれども、それは決して資本主義の一般的な姿ではなく、獨占資本主義と呼ばれる時代に於ても、需要に釣合はないで生産が營まれることは長續きしないのである。

而して生産は各人の欲望滿足が最大になる樣に營まれなければならぬといふ時、人は屢々、欲望滿足といふ意味を感覺的な快樂中心主義の如くに誤り解すけれども、それは決して正しい解釋ではない。其本來の意味は各人の經

濟上の欲望の選擇が原則として個人自身に依つて決定されるといふことである。現在に對する欲求と將來に對する顧慮との間の決定も、肉體的欲求と精神的な欲望との間の決定も、其他總ての種類の欲望の割當てが個人の決意に基いて行はれるのを原則とする意味である。而して此事は之までの個人主義的に考へられて來た經濟社會に於て當然まると思ふのである。斯かる欲望追求より生れる人々の行動は、現代の經濟機構の下に於ては營利的行動として實行されて居る。唯々單に資本家丈けが利潤の追求に於て營利的であるといふのでなく、總ての人々の經濟行爲に於て交換を通じて貨幣的利益をより多く得やうとすることに依つて營利的に行動して居るのである。それは決してマンチェスターの綿絲紡績業者許りの精神ではないのである。資本家の營利欲丈けを非難排斥するのは、多くの場合己れの本心をかくして手前勝手な議論を振かざす樣な感を與へて滑稽である。私は敢て營利心をば道德的であるといつて辯護する氣はないが、正直に人間の自己保存の本能から生れでた一つの精神的態度として承認する。經濟論に倫理的說敎を交へないといふ筆者の立前からいつても、之に善惡の判斷を下すことは差控へなければならぬ。

現代に於て營利行動を否定したり之を蔑視したりする風潮が一部に行はれて居る樣であるが、今之を外にしてどんな經濟が成立つであらうか。經濟生活を道德化することは誠に結構であるが、それが進んで營利行爲の否定にまで行き過ぎる時には、現代の經濟は破滅してしまひはせぬかと思ふ。

價値計算の推論に於て、筆者の念頭に在る價値概念はオースタリー限界效用學派に依るものである。ベーム・バウェルクは筆者の最も尊敬する學者である。限界效用學派による費用の說明即ち歸算理論が循環論法の强行を犯すといふ非難はよく聞く所であるが、私はベームに於て既によく說明されて居ると考へる。根本的生產手段の存在量と人の主觀的評價といふ前提から循環によらず說明ができると信ずる。主觀的評價が當該財貨の生產費用や一般市場價格を先づ與へられなければ定められないといふことは明かである。之は確に其通りである。併し此際注意しなければならないのは主觀的評價に影響を與へるのは人々の現在までの智識に屬する市場價格であつて、主觀的評價が決定要素たり得るのはそれに依つて成立せんとする所の價格である。人は與へられたる事情の下に於て豫想を立てゝ評價するが、此豫想は評價の究極の規準ではなく暫定的に止まるのである。市場の現實の豫想の規準と變らぬ限り、此豫想は決定的な働きをするが、併し現實の前には此豫想は屢々吹き飛ばされてしまふのである。限界效用說に循環の誤りが無いといふことは、私はベームの價値論に盡されて居ると考へる。ケッペル（Leo Köppel）の Grenznutzentheorie und Marxismus 1930 及びフロイダルスの Das Ende des Grenznutzentheorie? 1925 はそれ〳〵ブハリン及びオッペンハイマーの非難に答へてベームに依據しつゝ效用說を擁護せる小冊子であるが、其中にも委細は盡されて居ると思ふ。猶ほオーストリー學派と數理學派の見解との間には、私の考へでは相容れざる障害はないと考へる。後者は經濟的量の相關々係を函數方程式に記述したものであるが、前者は其一つ一つを取つて因果的說明を試みたものである。筆者は嘗て本誌第三十卷十號に於てハンス・マイヤーの「函數的價格論の認識價値」（Die Wirtschaftstheorie der Gegenwart Bd. II 1932 Hans Meyer; Der Erkenntniswert des funktionalen Preistheorien）を紹介して此點に關する見解を述べたことがある。

猶ほ論者は貨幣に依る評價に關して筆者がカッセル流の價値論無用論を利用して居ることを指摘せられて居る。私の考へではカッセルは無用論を唱へつゝも、實際には限界效用說を援用して居つたのである。それは彼の經濟原論の初めの部分を讀めば判ると思ふ。唯々ベームは人々の主觀的欲望の相互比較測定が可能である樣に說いて居るが、此點筆者はベームと意見を異にする。

勞働價値說に關する筆者の考へ方は痛く論者の氣に入らなかつた樣であるが、筆者は此點も獨自性に乏しい次第であるが、ベーム流の解釋に賛成するのである。種々雜多な勞働を比較する爲にはどうしても共通な價値の尺度が必要であり、それは勞働の價値生產力であると考へる。而して其價値の決定には勞働の生產物の價値が決定的な影響を持つのである。どんな社會關係に依り、或はどんな政治力が社會的平均勞働時間や社會的必要勞働量の意味を決定しようとしても、勞働の生產物に對する評價の影響力を無視しては合理的で理解し得ないといふのが私の見解である。勞働の物質的技術係數に依つて比率を計らうといふ一つの案は、勿論極端に技術的に見た一つの案であつて、それがマルクス流の考へだといふのではない。唯價値を無視した一つの案を例示して見たまでのことである。

又私は結論に於て社會主義的經濟計算の不可能を斷定したが、同時に當時の經濟狀勢から再び自由へ戻れ、一切の統制を廢せよなどと主張したてとはない。國家的計畫經濟よりも自主的統制組織を通じて過去の自由主義組織が果した經濟上の任務を實行するのがよいと思つたのである。

最後に一言著者に申上げたいことは、他人の說を批評せられるならば、今少しく用語を注意せられて無作法な言辭を濫用せられぬ樣に願ふものである。何の怨恨もないのに恥を知らぬかなどゝいふ樣な意味のことを投げかければ、勢ひ感情的にも阻隔を惹起し易く、議論は喧嘩にならぬとも限らぬであらう。人間の弱點かも知れぬが賣言葉には買言葉になる惧れの多いものであるから、議論には相當の禮を以てし、つまらぬ感情的刺戟の種となり易い形容詞は省かれた方がよいと思ふのである。

私はレーデラーの說を數年振りに通讀して見て、彼の考へ方が社會主義の爲に餘りにも樂觀的であるのを再び痛感するのみである。彼に於て社會主義的な費用計算は少しも解決せられて居らぬと信ずる。若し戸田氏にして、生產要素の經濟計算を主觀的價値に依らずに合理的に遂行して得られるといふ成算を持たれるならば御敎示を願ひたいものである。